

糧友会の組織と女子教育：丸本彰造による京都講演 (1929) の内容と活動を中心に

黄，慶旭
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7173450>

出版情報：飛梅論集. 24, pp.31-46, 2024-03-25. Graduate School of Human-Environment Studies,
Kyushu University
バージョン：
権利関係：



糧友会の組織と女子教育

— 丸本彰造による京都講演（1929）の内容と活動を中心に —

黄 慶 旭*

はじめに

本研究の目的は糧友会が食糧問題をめぐって政治に関与し、一般国民の食生活を平時から「軍事化」するため積極的に女子教育の活動を行い、全国的にその影響力を及ぼそうとしたことを明らかにすることである。

糧友会は1925年12月25日に陸軍糧秣廠内に設立された外郭団体として終戦まで存続した。『糧友』創刊号の「会報の補い」では食生活の研究と国民栄養の改善を目指し「食糧及び調理に関する研究改善普及を目的」としているが、「戦時総動員に見合った大量の兵食を迅速に調達することを容易にするための必要から生まれた組織」である（尾崎智子 2015：114頁）。政策においては殊に白米食に起因する脚気予防のための主食改善運動に積極的に乗り出し日本婦人団体連盟と協力し合っていたことが明らかになっている（尾崎 2015：114頁）。尾崎は婦人団体の活動を通して間接的ではあるが主食改善に糧友会が介入したことを明らかにし、食生活改善運動の研究において詳細に糧友会の存在に言及している。

生活改善に関する教育史研究においては社会教育行政が人々の「生活」や「消費」に着目した時代の「典型性」を描いてきた（久井 2008：157頁）。小山静子は生活改善同盟会をジェンダー史の視点で先んじて捉え、学校教育中心の文部省が行政組織を活発にし「通俗教育」から「社会教育」へ行政上用語を改称したことは教育の質的転換を意味するものであったと評価している（小山 1999：98頁）。社会教育を通じた生活改善は食物に関する知識普及と共に食生活のあり方を変え、家庭での普段の食事の準備はかなり主婦の神経を使うものとなり、家庭料理は歴史的 개념として登場する（小山 1999：156-161頁）。

食物に関する知識の普及に携わった糧友会は設立当初から研究や活動の記録を多く書籍に刊行する等、食と関連した分野において相当の研究を積み重ね、昭和から終戦にかけて一般家庭の食生活改善へ少なからずの影響を与えた。今日日本の食文化と生活様式の基本は大正から昭和初期に形成されたと言われる（藤田 1995：93頁）。殊に軍隊で盛んに食べられ研究開発したカレー、ハヤシライス、肉じゃがなどがこの時期一般家庭に普及し、洋食が都市生活者ばかりでなく地方にも普及し

*九州大学大学院博士後期課程

たのは、兵食が一般大衆への普及に寄与したからとされているが、その普及過程は詳述されているわけではない（阿部 1999：18頁）。

糧友会の機関誌『糧友』（1926年2月に創刊後終戦まで刊行）を用いた先駆的研究として、家庭の主婦向けの記事内容を重点的に分析し軍隊と一般家庭の食の関係を問うた安原美帆も軍隊が一般家庭の食を意識していたことは明らかとしている。一般家庭向きの記事の割合と芳名録の新規入会者の累積によって推定した発行部数の少なさから「兵食が『糧友』を媒体として、一般家庭の実際の食生活に与えた影響は小さかった」と結論付けている（安原 2003：68頁）。

安原は兵食改善の実践が機能するために、日々大量に消費される軍隊の食糧の安定した確保の要求から、生産者である農村の強化と消費者である一般家庭の消費の節約が求められたとし、そのことから農村と一般家庭も兵食改善の範疇に含まれていたという（2003：59-60頁）。これは『糧友』を単に兵食改善のためのものとして読み取ったために生じた解釈であると見られ、補足が必要と思われる。なぜなら『糧友』と糧友会は兵食改善を超えるより広範囲な政治的意図をもって設計されたため、農村と一般家庭のみならず、当時の「日本」全体を同時改善の範囲に含めていたからである。そこで本稿の第2章から3章にかけて『糧友』そのものを媒体としないで軍が一般家庭へ影響を及ぼそうとした方法が何かを問い、そのことについて解明したい。『糧友』は主に軍隊と団体の給養を取り扱った教育情報誌であるが、当会の動向が載り国民に働きかけた様相が読み取れる。

従って第1章では、先ず糧友会の有していた政治性について論証したい。先行研究で限定的な言及はあるものの、講究の対象として今まで中心的には扱われてこなかった当会の設立とその政治的背景について解明する。これは人口を主要な課題とした政府の機関としては最初のものと言われる「人口食糧問題調査会」（今後調査会）についてより詳しい情報を与えることが出来る⁽¹⁾。これまで文部省や内務省の活動を中心に捉えた生活改善運動の研究では昭和に差し掛かって運動の沈滞期を迎えたと言われてきた。しかし糧友会の活動が活発化したことを論じることは運動のパラダイムが食の改善を中心テーゼにした糧友会の活動へ移動したことを示すことになり、ここに本研究の意義が見出せる。また生活改善研究の教育史研究において議論されてきた問題である、多様な主体による運動内容とそれらの付置関係の考察の一助としたい（久井 2008：159頁）。

第2章では糧友会の内と外を取り結んでいた実務者丸本彰造の活動を通して、糧友会の働きと影響力拡散のメカニズムについて論じる。最後に第3章では丸本を講師に1929年6月7日から二日間に行われた京都市教育会主催の食糧映画講演会と京都家事研究会主催の瓶詰講習会の講演要旨を土台に糧友会活動の展開を検討したい（丸本 1929）。それぞれの講演の要旨は糧友会で出版され、「家庭科教育資料」「食糧教育資料」と記載し殊に家事科教育と主婦教育で頻繁に用いた内容である。当該講演会はとりわけ糧友会が主催した全国規模の食糧展覧会の直後に行われているため特に検討の価値がある。糧友会は食糧展覧会が開催したときを「飛躍発展時代」と名付けて「食展を中心として本会は飛躍的に発展し、会員の増加も最も著しい時代であった」と自評している（糧友 9-5：236-237頁）。従って講演要旨は糧友会による活動が本格的に水面に浮上する時期に刊行され、食糧展覧会の開催準備等を経ながら糧友会の主張がある程度体系的にまとまった形で表されていると考える。

尚、引用の旧字体は新字体に改め、引用文を除いて年は西暦に書き直している。

1. 糧友会の設立と目的

1-1 食糧協会と糧友会

『糧友』（1926年2月創刊）は、糧友会（1925年12月25日設立）と別個のものとして考案されたものである。軍隊給養⁽²⁾の改善を求める多々の声によって糧秣廠では軍隊内の通信書としての『糧友』の刊行を1920年に実施する計画を持っていたが刊行に踏み切ることが出来ずにいた（安原 2003：54頁）。ところが、糧友会の設立が決定したことを契機に上官命令で急ぎ足での刊行となっていた⁽³⁾。「戦時食糧対策機関として創立を企てられ」た糧友会の機関誌となったことは、当初の目的を軍隊給養の改善においた『糧友』刊行の予定にはなかったことである（糧友 14-2：16頁）。糧友会は「政党政派に超越した国家」機関として設立しようとした「食糧協会」に蹉跌が生じたため誕生した団体であり、そのことは、1941年に本名の「財団法人食糧協会」と改称するまで伏されていた⁽⁴⁾。更に、政治的利害を恐れたからか、食糧協会を「糧友会とは異なるもの」と否認していた（糧友 9-5：238頁）。

食糧協会は大本正期に台頭していた人口食糧問題の緩和と戦時における軍及び国民給養の独立を目的に「満蒙資源の積極的開拓利用を図る」ための機関の必要から考案された（糧友会 1927年：3頁）。田中義一を始め「官吏実業家等朝野の有力者を集め食糧の需給関係其他将来の本邦食糧問題につき努力することになり農商務、内務、文部、陸海軍各省より一名ずつの委員を挙げ」1924年7月13日に「公益法人」として「準備的発起を開いた」（大日本農会報 1924：50頁）。三井清一郎はこの時のことを振り返り、農商務次官の岡本国太郎と相談して田中に食糧協会の話を持ち込んだのは自分であったと明かしているが、そのアイディアの出所は田中であつたとしている（政界往来 6-10：118-119頁）。しかし、田中が政友会の総裁になったことで食糧協会の名は正式には闡明できず、「陸軍の一角に、糧友会といふ食糧協会に準じたものを拵えて席を塞いだのであつた」。

従つて糧友会は田中と関係が深く、彼が総理大臣に就任する直前の1927年1月から理事制に改め、陸軍主計総監の三井を初代理事長にして組織の完成を見ていた⁽⁵⁾。三井は理事長の就任の辞で「将来戦に對する国家総動員の準備を遺憾なからしむる」ため「平時より兵食と国民食との調和融通性を保たしめ、出来得る限り軍隊給養を国民給養に一致せしむる」ことを糧友会の使命であると明かし、食糧協会としての本来の活動の始動を暗示している（糧友 2-1：3-4頁）。同年の10月糧友会で刊行した『戦時の食糧問題に就て』は戦時における国家存立上国民の食糧独立が絶対的であると強調して「生産輸出入消費輸送及節約代用等の方策に関し軍用及び全国民の需要を総合したる方策を建てる為中央統制機関を設けるを要す」とし平時政策の具体を綴る（2頁）。ここでの「全国民」とは日本統治下にあつた樺太、台湾、朝鮮、北海道、満州なども含めるものであつた。

『糧友』の刊行と糧友会の活動は早くから陸軍と関係を取り結んでいた増田孝や機関誌の協賛を切っ掛けに糧友会の顧問になった渋沢栄一、大倉喜八郎のような財界の有力者からの支援に俟つところが大きかつた（現代食糧大観 725-726頁）。「三井合名会社」と「三菱合資会社」では食料展覧会

の際だけでも特設館建立の他に金一万円ずつを寄付し、他「大倉商事」等からも一時寄付の記録がある。中でも益田は第1次大戦後自ら丸本に面談を要請し糧秣廠と交渉をしたことから顧問になって以来『糧友』に食に関する軍の主張に同調する寄稿を多数著す等、深い関わりを持ち続けていた。丸本は「会勢拡張に就て大いに激励された」とし、糧友会と増田の関係やエピソードを著した『益田雑話』を糧友会の名前で刊行した。このことから糧友会が財団法人となる際には益田から相当の財政的支援を受けていたと考えられる(益田 1938 : 276頁)。また渋沢と関係の深い北日本汽船が「陸軍省糧友会後援会」の名前で財政後援をした記録があり、糧友会の2大財界の顧問の渋沢と益田が資金の大きな出どころであったことが推察できる(北日本汽船 1939 : 147頁)。

1-2 糧友会と人口食糧問題調査会

総理大臣に就任した田中義一は自らが監督となり、食糧協会をその「源泉」とする調査会を内閣に設置し⁽⁶⁾、糧友会の理事三井を調査会の人口部の委員に任命した⁽⁷⁾。『戦時の食糧問題に就て』は調査会設立の議決3か月後に発行し、その中にはイギリス、フランス、ドイツ各国の食糧政策情報と共に、田中の食糧政策計画が糧友会を通して盛り込まれていると読み取ることが出来る。この時から糧友会は調査会、殊に中でも食糧部の調査兼教育機関として機能し、『糧友』には新聞で詳しく報じない調査会の動向を詳細に載せ続けて「喧びすしかった人口食糧問題の解説指導に大いに役立った」と記載される⁽⁸⁾。調査会の人口部に属し、後に人口問題研究会理事長となる永井享は「当時の人口問題は主として食糧問題に関連して考えられておった(…)そのようなわけで、政府でも人口食糧問題調査会という名前で調査会をつくった」と回想した(永井 1960 : 1頁)。これは調査会の内実が、設置当初の狙い通り食糧問題がメインとなり、その中軸には糧友会があったと解釈できる。

糧友会や調査会の食糧部や食糧協会が実体としては田中を中心とする陸軍実勢の同一組織であり軍閥の政治色をはっきりと有していたことは、調査会設置当時それを批判していた声からも読み取ることが出来る。

田中大将が産業立国を唱へながら、対支出兵を敢てし、またシベリア出兵の夢覚めずに、満蒙特種利権、帝国の勢力範囲拡張のために自ら外務大臣の椅子を占めて、他に譲らざらんとしている(…)那須教授の注意する如く現下の食糧問題に国防問題が含まれていることと、食糧問題と農村問題とが混同されていることは一応頭において見る必要がある(関口 1927 : 524-529頁)

批判の言及通り田中は、自ら調査会を率いる会長でありながら外務大臣をも兼任していた。田中の直近だった三井などは、田中が「自分の年来の理想の満州問題解決のために中々外務大臣をやめられなかった」、「対支外交が即ち日本の外交でなければならぬ。支那と云ふ事が日本の外交の全部である」としていたと述懐する(政界往来 6-10 : 129、36頁)。田中内閣の出帆と共に始まった調査会は彼の没直後に解体された。1930年3月28日に東京朝日新聞記事で報じられた以下の政府答申案から解体理由の婉曲的な表現が確認できる。

我国の人口問題は（…）問題解決の針路を失い対策施設の基準を誤りまことに憂うべき事態に陥ることなしとせず、然るに現在の人口食糧問題調査会は政府の諮詢に応じ政府に建議する外常時において調査研究を行うに適せざる憾みあり

単純に説くと「問題解決の針路を失い対策施設の基準を誤りまことに憂うべき事態に陥」っていることは、田中の満州への進出計画のため食糧問題に国防問題が含まれていることを指し示し、「調査研究を行うに適せざる憾みあり」とは、調査会の実働が糧友会を中心にした勢力によって充てられていることを指すと言える。調査会の食糧部が田中の没直後に完全に解体されたことに対し、人口部のみが人口問題研究会に引き継がれる形を取った理由はこれで説明できる。「支那」の物資を利用するために日本全土を範疇に入れた食の軍事化をデザインしていたことは、糧友会支部を「内地」だけでなく「満州国」や「朝鮮」にも次から次へと設置したことからも明らかである（糧友 9-5：13 頁、14-1：130-132 頁、14-9：127 頁）。

1-3 国防経理

糧友会が設置された陸軍糧秣本廠は経理局の管轄で衣食住一切を取り仕切る主計が中心であった。一次大戦後平和ムードの組成と軍縮の中で「軍隊経理とはいえ、一般官庁の会計事務と異なるところなく、給養補給というも、地方工場における合同炊事と大差はない」ことを免れようと、経理部首脳の間では「国防経理」概念が打ち出されていた（若松会 1986：2 頁）。それはイタリアとドイツを模倣し「全国民生活を軍事的方針に基づき経済的及び社会的に組織すること」であった（日本読書協会会報 19-229：289-290 頁）。

主計らにとって困ることは軍では重宝する食材でも普段食ではそれほど消費されないこと、また生産が減ったり、製造場が無くなったり、器械を使わなくなったりしているためにいざ戦時になった時には軍需品としてすぐに物量が確保できず、手に入らないことであった（糧友 1929：136-137 頁）。軍需食糧品を絶やさずしておくためには一般消費を喚起し、国産を利用して生産を興し、輸入品を駆逐する必要がある。この理由から「平時より兵食と国民食との調和融通性を保たしめ、出来得る限り軍隊給養を国民給養に一致せしむる」必要が生まれていた（糧友 2-1：3-4 頁）。そこで「軍隊の台所から」「美風を率先して国民一般の台所に迄普及し、国民給養の改善」と食糧問題改善に資すると志していた。

田中総理のもとで調査会という政府組織の資源を利用しながら「国家的事業」を行う会となった糧友会は（現代食糧大観：9 頁）、鈴木梅太郎や島蘭順次郎、永井潜など著名な専門学者達と共に旺盛な活動ぶりを見せた。糧友会との関連が深かった缶詰協会は「わが友会たる糧友会の活躍は実に目覚ましいものである。本年は大阪、広島、金澤に支部を設け団体炊事研究会に、家庭壘詰に、パン談会に、米談会に或は講演会を開催し、また当協会と連合して、通俗食糧品講演会を開くこと十一回に達し、其他實際方面に対する活動を続けさらに明年三月よりは上野公園に於て、食糧展覧会開催の準備を進めつつあり」と報じる（缶詰時報 7-12：4 頁）。糧友会に学術上のデータを供給した

東京市衛生試験所に1931年に入所し1942年から2年間『糧友』に記事を請託され毎月載せていた高木和夫は、糧友会の活動を「かなり派手な運動」として記憶していた（高木1985：424頁）。

2. 糧友会の事業拡大のメカニズム

2-1 丸本彰造の活動

糧友会は様々な団体と協力し活動の裾野を広げていた。農林省からの依頼で銀座や大阪等で羊肉奨励宣伝として料理講習会や売り会を行なったり、三越本店の「台所展覧会」に出品したり、「日本婦人経済協会」が丸の内大阪ビルで開催した「経済生活資料展覧会」に資料出品したりと、政府機関や商業施設、婦人団体などと連絡し、積極的な協同活動を繰り広げた（糧友7-2：134頁）。このような活動の殆どにおいて窓口を担当したのは陸軍経理学校第1期卒業の76人中一人の丸本彰造である（官報1907年5月27日）。『職員録』（内閣印刷局編）などから彼の順調な昇級の痕跡が見つかり、1914年12月26日の『官報』には歩兵第51連隊第3師団経理部部員の陸軍一等主計として戦役の功により勲章と年金を授与した件が記されている。丸本は7年間に亘る全軍の巡廻調理指導の責任者を務め、糧友会の設立や『糧友』、食糧展覧会、調理技術員養成教育及び派遣等、兵食に関係した諸般の実務を第一線で担った人物である。後に陸軍経理学校の後輩らは丸本を「戦地における未知の材料を以て、好適な兵食を調整し、食べることを以外に楽しみのない将兵を喜ばしめ、士気を鼓舞し、戦力を増強するに偉大な貢献を為した「陸軍経理部内きっての異色の偉材」と回想する（若松会1982：167-168頁）。渋沢栄一の日記には、『糧友』協賛の件で訪れた「陸軍士官佐藤金治・丸本彰造二氏来訪ニ接シ、雑誌糧友ノ賛助ニ付種々依頼アリ」と書いてあるように、糧友会のロビー活動の一線にも彼の姿が見える（渋沢栄一伝記資料49巻632頁）。

「戦時と平時の食糧共通が現出する」ために、缶詰協会と連携し普段から開缶研究会や品評会、一般向けの通俗講演会を開きそこに参加することも丸本の仕事であった（缶詰時報7-6：119-121頁／水産界540巻：616頁）。その関係から『缶詰時報』には、1928年12月丸本が越中島の糧秣本廠より移動の際には「缶詰業界と特に密接な関係を保持せられ、業界の為に真に親切な指導を為されつつあった、陸軍二等主計 彰造氏は（…）陸軍省衣糧課長へ栄転された」と公に報じ彼との親密さを披瀝していた（8-1：63頁）。丸本は開缶検査の時に得られた詳細を自分なりの図表と統計にまとめていた。持参した大きなカバンの中からそのような分析表を取り出して、それをもとに検査の結果を発表する丸本の仕事ぶりについて『缶詰時報』の山村輝は「緻密な統計の上に立つからあの活動ができる」、「糧友会の活躍の根本はあそこにあるのだ」と称賛した（糧友5-10：12、69頁）。

2-2 宣伝普及の取り組み

糧友会は『糧友』の誌面だけでなく、他の新聞・雑誌の関係者達と関係を取り結び頻繁に多様な読者層へ、とりわけ女性向きの雑誌へ多くの情報を発信していた。言論関係者らは「我々新聞雑誌関係者を通じて食糧知識普及に大童であられた丸本氏」、「宣伝と実際に相伴って研究しておられる」

との修飾を丸本に付した（糧友 5-10：62、64頁）。彼が朝鮮へ発令を受けしばらく「内地」から離れる際、「親交のあった業界新聞雑誌、各新聞社の家庭欄記者、栄養、調理の研究者」達の座談会が設けられた。糧友会の日頃の情報発信の媒体は座談会記事だけで見ても、『缶詰時報』、『食糧評論』、『同仁』、『報知』、『科学知識』、『日本青葉時報』、『家の光』、『米の友』、『報知新聞』、『飲食通信社』、『国民新聞』、『食道楽』、『日本水産新聞』、『パン友』、賛育会、東京割烹女学校校長等々、フランス料理研究家、栄養料理研究家、早稲田精米所などが列挙出来る。その他『家事と仕立て』にも丸本や糧友会発信の記事が確認できる（2-10：126-130）。産業組合中央会で発行し、生活改善の媒体として最も農村に広く普及した『家の光』の松山一郎は次のように述べる。

糧友会が国民食糧及び栄養の一般的普及に盡された事は偉大であると思います、その背後には丸本さんが非常なる尽力をしておられる（…）その際糧友が生まれとどん食糧の知識を普及して下さったことは真に有難い、糧秣廠発表献立の如きはある家事科の先生方の会合の時に問うて見ても、何処の献立よりもより实际的だといっておりました（糧友 5-10：65頁。下線部は引用者による）。

文が長いため省略（…）したところは、栄養研究所ができた頃は佐伯博士側からの通俗栄養講座や新聞を通じて情報発信があったが、その方針が変わったためか、研究所の職員からも情報が得られないという内容である。そこから、栄養学の先駆として佐伯のところから発信していた一般向けの情報が、糧友会よりの発信へシフトしていたことが読み取れる。下線部からは当時、献立の提示もとが数か所存在し、家事科の教師たちは多方面からの情報を比較しながら参考に使っていたことが浮き彫りになる。教師たちが『糧友』を読み、そこで提案する献立をどこよりも「实际的」とし参考に使っていたことは注目に値する。『飲食料通信』記者は、「我が国は従来からの習慣として官吏と商人の間が大きな隔りがあって全く打ち解け難い怨があった（…）生産者側と軍隊側との融合連絡をとって心状打開に努められしは之れ元より陸軍省、糧秣廠、糧友会などの力ではありますが、その陰に丸本先生の活動があることは周知の事と思ひます」と述べ、丸本が生産者側と軍の間で緊密に連絡を取っていたことを窺わせる（66頁）。言論界を通じて糧友会の主張を発信することに尽力していた丸本の姿に「食糧の為に一身を投げ出して尽」くす人と評した同記事の言葉からは、糧友会が講習・講演だけでなく、相当の誌（紙）面を借りて積極的に宣伝と普及に努めていたことを教える。

2-3 国民の食糧問題への関心

丸本は「食物を如何に買い入れ、また如何に消費するか」、「平時（…）戦時の軍隊に於てどう云ふ風に此の食物を補給するか」を仕事にし、それを陸軍の学校で教育する任務に当たっていると主婦達に自己紹介した（教化団体連合会 1927：559頁）。また、内務省社会局主催の家庭実務指導者講習会では自らを「實際家」と紹介し次のように述べた。

国民の台所が合理化し能率化されたならば、軍隊の台所も自然に合理的になり能率化されるといふことを考へ、又平時に於ける所の食糧問題が合理的であれば、戦時に於ける食糧問題—或は栄養問題と謂つても宜しうございますが—また合理的に行はれる(…)平時の生活を能率的に合理化することに依て、将来の文明戦争に勝を占めるのである(教化団体連合会 1927: 560頁)

糧友会の考える食糧問題の合理化は栄養問題の合理化としても認識されていたことがわかる。「軍隊の台所」と「家庭の台所」は「極めて密接な関係がある」とする丸本は「私の食糧に関する熱烈なる奉公心の胚胎も(…)微力ながら食糧改善についての活動も皆此の米騒動を起点として今日に及んで居る」と言い、次のように米騒動から受けた衝撃を回顧する。

怒声、罵声、呪咀の声、飢え干からびた陰悪な面相せる労働者達が眞黒になって米屋の占領、廉価販買を強制する、倉庫を襲ふ、運送途中の米を押へる警鐘亂打、暴民横行、しかも警察官は影を潜めて威令は行はれず、軍隊各地方に出動して暴民を驅逐し警戒に任じ(…)当時は無政府状態とでも云った戦慄すべき状況で(…)此上軍用米を調達するが如きは到底不可能と判断されたので、『軍用米調達困難』と云ふ報を上司に電報復命したのであります。而して此の米騒動は遂に寺内内閣を瓦解せしめたほど重大な問題であった(糧友 4-9: 130頁)。

米騒動の記憶は丸本に「国民疾病」として刻印され(丸本彰造 b 1929: 14頁)、「「全生を挙げて」もと私の心持に一転を画し」食糧改善に努めさせた事件となったと綴った(糧友 4-9: 129-137頁)。民衆の生活への不安はシベリア出兵問題の高潮で絶頂に達し「軍用米御調達といふことが、一層米価の暴騰と米糧不足の脅迫観念とを煽つて米騒動の拡大性に力づけた」と回想する。これを契機に軍隊では食糧の安定した確保と一般家庭の消費の節約のための教育の必要を強く認識するようになり「米に対する執着心を打破」「食糧及調理に関する知識技術を普及」「貯蔵生活を徹底」の三対策が練られた(糧友 4-1: 113)。

3. 糧友会の台所教育

3-1 京都市での講演・講習会

講演会が開かれた京都市公会堂は第4回内国勸業博覧会が開催された岡崎地域にあり、明治後半から大正時代までいわゆる「岡崎文化ゾーン」を形成したところに位置していた⁽⁹⁾。講演内容の骨子は同年8月に調査会の幹事会で決まった食糧問題に対する具体的諸方策の内、食糧の価格の変動、食糧品の貯蔵と配給に関する方策、国民食糧消費の慣行改善及び食糧に関する知識の普及項目と関連する(田中内閣編纂所 1928: 146頁)。丸本は「政治は家事の延長である、一国政治をよくやるには国民生活を合理化しなければならない、生活の合理化はまず家事の合理化より始めなければなりません」と述べた(丸本 1929 b: 2頁)。

2千人の京都の婦人を相手に3時間に及んだ講演会では、ドイツやアメリカから持ち込んだ教育の道具が同時代的に使われた。集中力分散防止の工夫を凝らし講義に挟んでいた「文化映画」4本のうちの一本はドイツで制作した「実に完全な栄養知識普及映画」であった⁽¹⁰⁾。それは解剖学や医学に基づいた人体内の活動と食物との関係を栄養知識から教えるもので、国民に食物知識を普及し食物の力を借りて国力復興を図る目的でつくられた(丸本 1929a: 14頁)。丸本はアメリカの一般家庭の台所には州知事が配布した栄養上の注意書きを見やすい場所に掲げ料理上の栄養と経済に万全を期しているとし、視察の際ある家庭の台所に貼ってあった酸性とアルカリ性の食材区分の表を乞うて持ち帰ったと紹介した。それを糧友会の栄養一覧表と共にアメリカの主婦同様に台所の見やすい所に貼り、常に食品の選択と配合調理の合理化に利用するように配布奨励した(16頁)。

3-2 主婦の消費者教育

消費のための購入においても、主婦の台所と軍隊の台所は密接な関係を持っていた。陸軍省の経理課では各師団等に各種組合や農会などの利用の概況を調査・奨励し「軍隊に於ける購買価格が如何に小売市価よりも低廉である」のかを比較した結果、組合利用の直接取引によって1割から6割弱まで安く購入できることが判った(糧友 1-1: 59-60)。同記事には公設市場の価格について「比較的標準となり得る価格が発表されて居るので同等の品質のものをを用ゆべき軍隊に於ける購買価格が如何に小売市価よりも低廉であると云う事を比較対照するのに便宜がある」と教えている。軍が仕入れる生産団体に「経営其の宜しきを得ず徒らに営利的に馳するもの或はまた信用程薄弱たるもの等の欠陥を有するもの少な」くないとの指摘や「糧食経理改善に関する考察」が『糧友』に連載したことから仕入れ額を節減し高額を占める糧食費を減らすことに糧秣廠の主眼が置かれたことが窺える。この問題は国民教育の要求へつながら、品質鑑別力と値段適否の判別力を備え自ら不正を防止できる消費者教育が必要であると言われた。

配給組織の非合理的なる結果、其市価に累を及ぼし、又小売商人の爆利を貪り、不正品、偽造品、非衛生品等を販売し、一般市民に迷惑をかけ(…)一般の人々が毎日の必需品たる食品の品質又は値段などについて、余りに無知式無関心なる結果、商人の乗ずるところとなる(…)問題の解決には食糧知識の普及徹底を図るより他に手段は無く(…)一般国民に食糧知識の普及を図ることは国民生活の上より、社会政策上よりも、将又人口食糧問題解決の上よりするも極めて緊要な事業であらねばならぬ。(糧友 4-1: 18-19頁)

『糧友』では「放漫にして統制なき現今の市場制度に於ては、中間機関がますます複雑となって中間において吸収せらるゝ利益はますます多きを加へる」ことが物価を割高にすると指摘した。それに比べ、農家収入は消費者の支払う価格の三分の一以下に過ぎず、これが農家逼迫の原因をなすとした(5-10: 3頁)。丸本は京都の婦人達が公設市場の小売市場を利用しない消費不振が「不当の高価と鮮度の低落戸を招く」ため「中間搾取の弊を一日も早く芟除」し、食糧配給者が量や質、高価

格等の不当を働くことがないように「食糧道德涵養の機運を醸成する様仕向けることが必要」であると訴えた（丸本 1929a：12-13頁）。そしてこれは「目醒めたる現代婦人の重大な仕事」であると主張していたが、戦時国民給養独立の方策として糧友会が立てた「国内取引に関する政策」の中に「主要食糧品最高価格の公定」という項目があり、そのための教育の一貫であったことが分かる（糧友会 1927：6頁）。

公設市場は地方自治体の監督のもとに、内務所によって1918年初めて設置された（小山 1999：85-86頁）。モデルケースとして重要な中央卸売市場の先駆は京都に開設され、出品者を直接生産者より選ぶという原則が取られた（並松 2017：324、332頁）。しかし物価騰貴と米騒動を背景に開設した治安対策を兼ねた社会政策的廉売機関にすぎず（原田 1991：118頁）そのために「都市下層民のためのものと考えられがちで」「救済を看板に掲げた廉売に対して、中間層は自らの体面のゆえに躊躇を感じてしまう」と言われたように（小山 1999：86-87頁）京都での利用も伸びなかったことが丸本の講演からも窺える。当時は主婦が自ら日用品を購入するために出かける習慣がほとんどなく、現金・正札取引と無配達制度を特徴としていた公設市場は従来の買い物のやり方を一変させることになり、その不便さも利用の伸び悩みに一助した（小山 1999：86-87頁）。

1932年『糧友』3月号からは「食品の標準物価を知ることは、炊事経済合理化の第一階梯」とし、団体炊事用の御相場と家庭台所用の小売価格を示した「食糧物価表」を「常設附録」に付し、台所用品物価の標準に利用するよう奨励した。糧友会では商業界へ良心的な物価の透明性を求め全国的に大幅な変動のない物価調節を試みるために、常設附録に付けた物価表の情報を更新しながら主婦に向けて公設市場利用を奨励した。世界的にも類比を見ない一国の法令を以て制定され「公設」された特徴を持つ日本の中央卸売市場によって、既存の小売業全体を網羅する制度的な規定の整備が行われた。そして、既存の卸売市場は閉鎖されて行き、市中価格は公設小売市場の価格によって安定的となった（並松 2017：306、332頁）。

3-3 家庭貯蔵の奨励

米価暴騰を一因に勃発した米騒動に相次ぐ1920年の米価暴落は政府が凶作に備え米穀を買入れ平常時倉庫保管する「米穀法」を誕生させた。食糧問題解決のために糧友会は「国家大貯蔵」を形成することを押していた。「貯蔵生活を徹底」することは、米騒動の恐怖を直に経験しシベリア出兵に蹉跌を食らった陸軍が「国防と食糧」問題解決のために講じた一つの対策でもあった（丸本 1929b：14頁）。しかし「平常倉施設は最も意義あるもの」として米穀の貯蔵施設を増やそうとする主張に反対の声も大きかった（糧友 49：135頁）。それは「貯蔵米が変敗したとか、予算上大損害であるとか、米価調節に何等の役に立たない、いつその事廃めたら宜からうなどの議論」が巻き起こるなどの問題が露呈していたからである。丸本がそのことに対し「持ち腐れになることは寧ろ望ましいことであり」「微々たる保険料であると思って吾人は喜んで負担すべきである」としたことは日頃の貯蔵にこだわる気持ちを強く雄弁する（糧友 49：135頁）。「家庭貯蔵が出来てこそ、我々の生活は（…）始めて安定するのであります、家庭に於ける、その総合せられた所の総数量、是は国民の大

貯蔵ということになる」とし、糧友会は食糧問題解決策の一つとして、国が米穀を貯蔵する「国営大貯蔵」と「家庭貯蔵」を合わせた「国家大貯蔵」の形成を構想した（缶詰時報 7-5：105頁）。

丸本は強い事なしに国民に貯蔵観念を植え付けるための方法を探し求めて各国を調査した結果、外国一般に行われて居る家庭瓶詰にたどり着いたという（缶詰時報 7-12：53頁）。当時家庭瓶詰は各国共盛んで、殊に米国では一家庭に百数十本も利用されていることから、「我国で若し一戸平均十個ずつとすれば、全国では、一億数千万個程これが利用せられる」と見積もった（缶詰時報 7-12：55頁）。戦争を切っ掛けに、より拡散していた家庭瓶詰は「季節外れの時に取り出して、出来栄えを誇らかに食べる、経済的趣味生活のために競」う家庭主婦たちの高尚な台所趣味となっていた（缶詰時報 7-12：54頁 / 糧友 4-1：114頁）。

国民に「貯蔵主義」を吹き込み普段からの食糧貯蔵の機運を促進すべく考案した家庭貯蔵瓶は研究を重ね（缶詰時報 7-5：105頁）、完全に貯蔵が出来る瓶の完成をもって『糧友』3巻2号「家庭貯蔵瓶詰」に連載を開始するまで長い時間を要した（糧友 4-1：111頁）。糧秣廠では「大正十一年文部省主催生活改善講演会で全国より参集の教育者に対して現物を提示して講演したと思うようにいか」ず、4年後の1925年に「内務省主催の社会改善講習会にて再び現物を提示して講演」を行った。糧友会が貯蔵瓶を開発する以前から瓶詰をしていたというある高等女学校の教諭はアメリカで覚えた瓶詰を日本で作ろうとしても瓶自体が外国製の奢侈品扱いで困った経験を話した（『糧友』4-4：97）。京都の講習会では「貯蔵瓶利用上の予備知識として貯蔵瓶概念及び瓶詰操作上の心得と併せて栄養経済に関する」講演の後に実習が行われた（丸本 1929b：5頁）。早くから設けられた糧友会の諸支部でも実演を交えた「食物貯蔵瓶詰講習会」を持続的に行ったことが『糧友』で確認でき、女学校などに糧友会の主事などが赴いていたりもした。学校教育でも「加熱殺菌密閉の貯蔵技術と共に、細菌学物理科学上の原理が实际的に教育せられる」とし、「家事教育において、貯蔵観念の涵養、貯蔵技術の実習上に活用する」ことを奨励していた。そのため丸本も家事科の教育者達を相手に講演と実演を繰り返した結果近年学校からの需要も多いとし、通俗講演会では瓶詰の現物として高等女学校の生徒達の作った物を並べて提示していた（缶詰時報 7-12：55-56頁）。学校教諭と『主婦の友』『報知新聞』『国民新聞』関係者が参加し情報交換を行った瓶詰持ち寄り茶話会の記事からは、一般の主婦に先立ってまず学校の教諭に糧友会による瓶詰知識が普及したことがわかる。またその拡散効果が早くも学校現場で現れ、東京で講習を受けた大阪の小学校教諭の場合は、生徒に瓶詰を教え出品したところ、児童作品展覧会で選ばれていた（『糧友』4-4：96-103頁）。「私の宅でも子供は瓶詰が大好きで、詰めますときは大騒ぎして手伝ってくれます（…）この点をうまく利用すれば有効な教育を徹底させることが出来るでしょう」との話から窺えるように、瓶詰は子供の関心も引き寄せていた様子である。丸本は茶話会の席上で「子供の注意が台所に向く、実生活教育の絶好の機会が得られる」よう台所の殺風景さを瓶詰によって四季色豊かに美化するよう勧めた。

糧友会は貯蔵瓶を9本まで加熱消毒できる専用の「加熱釜」も考案宣伝し、かなり需要が増えていたと察せられる（糧友 6-9：57頁）。このような背景の一つには「家庭貯蔵瓶詰品評会」を開いたことが影響したと考えられる。家庭貯蔵瓶頒布5周年を記念して開かれた第1回品評会の広告では

「御声援を得て、全国的に普及してまいりました」と述べ、瓶詰技術の向上と瓶詰の真価を社会に高揚徹底させるとその抱負を明かした（糧友 6-11：87頁）。出品者は糧友会の会員とその家族、或いは、官公署、諸学校、農会組合などの有志に限り、運搬費は出品者負担だったが、東京市と近辺は集荷返品便が設けられた。開催場所も「百貨店の王座を占める三越で殊に一階中央であったため、毎日数万の観覧者を迎へ」た。応募作品の瓶は5日間陳列し、希望者は売り上げの割を払って委託販売もできた。

「我国で創めての催し」と見出しを付けた記事には「北白川宮姫宮殿下の御出品御援助と御鑑賞とを賜ふ」と誇る文句が目立つ（糧友 7-1：65頁）。宮家から貸し出された24点の瓶詰は「三越一階中央の大ケースに陳列して一般拝観を許され」た。三越という商業施設に皇族の出品や会場鑑賞もあり、会場は相当賑わっていたであろう。皇族も作る瓶詰は単に台所の食べ物から離れ、鑑賞する作品として三越百貨店中央に陳列することで、当時の女性らには新たな高尚な趣味の一つとして喚起された。さらに「瓶詰説明宣伝のためには食糧品売場に実演場を設け、出品人其他関係来賓のためには本会専用の休憩所を設けた」とし、糧友会の位を特別に感じさせるような宣伝も兼ねていたことが分かる。出品者も「東京附近はもとより、長野、群馬、新潟、神奈川、岩手、山梨、北海道、石川、福井、山口、岐阜、鹿児島各地各々の特産物を詰めたものが出品され、その数実に百八十六点、二十五種に上った」と報じることからも瓶詰に相当興味関心が持たれ、広く知れ渡っていたと思われる。

「此の十二点は何れも審査員の賞賛措く能はざるものである故に之が順位を決する事は仲々の難事であった」との審査評から、瓶詰が相当腕を磨いた人達によるものであったことが窺える（糧友 7-1：136-139）。入賞作品に選ばれ賞状や名前や居住地が掲載された記事は当該女性らに誇りを抱かせ鼓舞したであろう。以下にその審査評の一部を紹介する。

出来栄の良いもの、揃って居るのに驚きまして此審査は良いものを選びますより出来栄の悪いものを選び出す方が容易である様に考へました（…）審査は非常に厳重で、百八十六点中から僅かに六点和云ふ（…）外観から看ても、製造技術の上から見ても、甲乙のない（…）僅か五ヶ年の間に糧友会家庭瓶詰が、斯く進歩しました事は実に驚異の至りで（糧友 7-1：139）

また、「（栗に：引用者）渋は少しでも残って居ると水がにごり味をも損してしまいます。また桜桃は粒と熟度の不揃いものが一、二有った（…）原料種の選定から注入液の濃度、詰方、加熱程度等一点非難する余地の無い」と審査で惜しかった注意点も掻い摘んで添えられた。食物を腐らせてしまう微生物の話から、その発育に必要な水分量、発育を防ぐ添加物と必要分量、病原菌の消毒や熱、温度と時間との関係、保存の最適環境とその理由などが再度教えられた。保存に向く食材や旬の時期など、以前は家庭の中で世代間に生活を通して伝授されたような日常を、知識として教わることになる。このように大正期から昭和初期には瓶詰保存普及のような教育活動を通じて、日常における「食」は生物や化学的原理を説く専門用語で言い直され、科学的理論をその「知識」の確固

たる土台にしながら次第に形を整って行った。

従って瓶詰品評会は、高尚な趣味家達のための単純なイベントではなく、その調理の準備から制作過程そして結果に至るまで食品を扱うに適切な知識を要し、主婦たちがそれらを身に付けているか、また実践しているかを一つの瓶の中に詰めて透かし見るような確認の場でもあった。雑誌や講習会、又近所の知り合い同士で作り方の情報の共有や伝達を通じて行われた社会教育の産物でもあり、それに呼応した婦人達の実在でもある。糧友会で制作して実費頒布したという保存瓶は「糧友」の二文字がくっきりと太く刻印され、2023年の10月現在もネット上で多数販売されていることが確認できた。

結論

本研究では糧友会が食糧問題をめぐって政治に関与し、一般国民の食生活を平時から「軍事化」するため積極的に女子教育の活動を行い、全国的にその影響力を及ぼそうとしたことを明らかにした。

第1章では、糧友会が食糧問題をめぐって政治に関与した機関であったことを論証するために、当会が「支那」の資源利用を目的として田中を始め政府関係者らと陸軍主計が中心となって設立した、食糧協会や人口食糧問題調査会の食糧部と根本的には同一機関であることを明らかにした。第2章では、人口食糧問題調査会と財閥の政治・財政的援助を背景に、糧友会が食生活改善の影響力を全国的に及ぼそうとしたことを解明するため、実務者であった丸本の活動を中心に検討した。そこから国家機関や諸団体と協力しあったり、一般向けの通俗講演会を開いたり、学校へ講師を出向かわせたりと教育を行う傍ら、教材の刊行や多数言論を通して積極的に主張を発信しながら、糧友会の影響力を全国的に拡大していったメカニズムについて解明した。最後には、丸本が京都の講演・講習会で重点を置いた公設市場の利用と家庭の食糧貯蔵瓶詰に注目して糧友会が行った教育の内容について確認した。

糧友会が食生活改善のために女子教育を積極的行ったことは、田中の率いる陸軍勢力が満蒙特種利権と帝国の勢力範囲拡張を計画していたからであった。戦時において国民の不安が米騒動のような形で再び起こり得る可能性を予め払拭しておくためには、国民経済を統制する基盤づくりと教育が必要であった。そのため女子教育が強く意識され、「日本全体」の国民の食生活は軍事的関心事となり、食生活の軍事化が試みられた。しかし、ドイツの食糧教育映画やアメリカ州知事の配布した家庭用栄養表、欧米諸国で盛んに行われていた家庭用瓶詰や公定価格の情報を得た上での公設市場の利用など、最新の知識が同時代的に日本の主婦達にも手渡されたことは糧友会の積極的な教育活動に俟つところが大きかった。

<注>

- (1) 糧友会は人口食糧問題調査会と深い関連のある組織であるが、このことは糧友会側の資料からしか見つからない。廣嶋清志は(1980: 50-51頁)人口食糧問題調査会が3年足らずの短い期間に非常に活発に活動をし22の刊行物を発刊したことに言及しながら、これらの記録があまり紹介されず、調査会の意義についても十分な検討はなされてこなかったといっている。調査会の資料を使った人口問題に関する研究として杉田菜穂の研究が知られている。「日本における人口政策論の水脈——永井亨の人と思想」『経済学雑誌』第110巻1号、2009年。「日本における人口資質概念の展開と社会政策——戦前から戦後へ」『経済学雑誌』第116巻2号、2015年など。
- (2) 『糧友』では兵隊の賄について「給与」をよく用いていたが、徐々に「給養」の言葉を多く使う傾向が現れ、誌面上両者の厳密な区分はされていないように見受けられる。
- (3) 1920年から準備をしていたが、創刊号の「編集後記」では「諸種の事情により発刊時期を急ぎたる為、計画から実施に至る期間が全く短く」と綴る。『糧友』10巻7号、1935年、36頁と「田中義一大將を偲ぶ夕」『政界往来』司会往来社、1935、119頁を参照。
- (4) 「会名改称の辞」『糧友』第16巻4号、1941年、1頁。1941年3月15日から改称
- (5) 1938年3月に財団法人に変更『糧友』4月号から編集発行人も丸本彰造になっている。
- (6) 糧友十年『糧友』第9巻5号、糧友会、1934、238頁「食糧問題が識者間に漸く認識され始めた大正十二年末から十三年にかけて、帝国食糧協会設立の運動があつて、「この運動の水脈は後に起こる人口食糧問題調査会の遙かなる源泉となった」と綴っている。
- (7) 調査会委員の稲垣乙丙、鈴木梅太郎、永井潜、牧朴眞の名前も『糧友』によく登場する。
- (8) 若松会『陸軍経理部よもやま話 続編』1986、3頁。『陸軍経理部よもやま話』1982、168頁調査会の記録からは糧友会との関連が管見の限り一切見つからず、糧友会の名前も当初は「食糧協会」と関係のない事と否認していた。
- (9) 岡崎地域活性化ビジョン検討委員会資料9頁(2023年10月20日最終閲覧確認) <https://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/cmsfiles/contents/0000085/85228/siryoku4.pdf>
- (10) 当日の上映した映画は「稲の品種改良」(生産増加に関して)、「稲穂の国」(稲穂建国の精神培養)、「家庭貯蔵瓶」、ドイツの栄養知識映画「吾ら日々の食物」である。

<参考文献>

- 阿部典子「新聞に見る食生活の近代化——第2期大正期(1912年～1931年)」『藤女子大学・短期大学紀要』第37号、1999年
- 井内智子(尾崎智子)「昭和初期における被服協会の活動」『社会経済史学』、2010年。「日中戦時下の女性運動——日本婦人団体連盟による「白米食廃止運動」——」『社会科学』第45巻3号、

- 同志社大学人文科学研究所、2015年
- 『家庭実務の指針（教化資料；第57輯）』教化団体連合会、1927年
- 『北日本汽船株式会社二五年史』北日本汽船、1939年
- 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』勁草書房、1999年
- 『渋沢栄一伝記資料』第49巻、公益財団法人渋沢栄一記念財団、632頁
- 関口泰『普選と新興勢力』日本評論社、1927年
- 高木和男『食と栄養学の社会史』第一増補版、1985年、白眉堂
- 『田中内閣』田中内閣編纂所 1928年
- 永井亨「わが国における人口問題に関する調査研究機関の来歴について」『人口問題研究所年報』第5号、厚生省人口問題研究所、1960年
- 並松信久「近代京都における公設市場の展開——中央卸売市場をめぐる」『京都産業大学日本文化研究所紀要』第22号、2017年
- 原田政美『近代日本市場史の研究』そしえて、1991年
- 久井英輔「戦前生活改善運動史研究に関する再検討と展望——運動を支えた組織・団体をめぐる論点を中心に——」『兵庫教育大学研究紀要』第32巻、2008年
- 廣嶋清志「現代日本人口政策史小論——人口資質概念をめぐる（1916－1930年）」『人口問題研究』154号、国立社会保障・人口問題研究所、1980年
- 藤田公仁子「大正～昭和初期の札幌における食生活・文化の変容の条件」『社会教育研究』1995年
- 益田孝『益田雑話』糧友会、1938年
- 丸本彰造 a『食糧問題と吾等日常の食物（家事科教育資料）（食糧教育資料）』糧友会、1929年
- 丸本彰造 b『家庭貯蔵瓶と家事教育：府・家庭貯蔵瓶詰考案の動機と普及の要旨（家事科教育資料）（食糧教育資料）』糧友会、1929年
- 安原美帆「雑誌『糧友』にみる兵食と一般家庭の食との関連について」『風俗史学』第22巻、2003年
- 若松会『陸軍経理部よもやま話 続編』1986年、『陸軍経理部よもやま話』1982年
- 「我国人口食糧問題と家事教育に就いて（二）」『家事及び裁縫』第2巻10号、1928年
- 『水産界』540巻、大日本水産会、1927年11月
- 『大日本農会報』「食糧協会設立」（523）、大日本の農会、1924年
- 『政界往来』「田中儀一大將を偲ぶ夕」第6巻10号、司会往来社、1935年
- 『日本読書協会会報』19巻229号、日本読書協会、1939年
- 『缶詰時報』日本缶詰協会
- 糧友会『戦時の食糧問題に就て』1927年、『現代食糧大観』1929年、『糧友』

**Organization of the RYOYU-KAI and women's education:
Focusing on the contents and activities of Shozo Marumoto's Kyoto lecture (1929)**

KyungOok WHANG

The purpose of this study is to clarify that the dietary habits of the Japanese people were militarized by the Ryoyu-kai, an outside organization of the army's food factory. To this end, the Ryoyu-kai conducted women's education activities nationwide. Prime Minister Giichi Tanaka and other government officials from the Ministry of Agriculture, the Ministry of Commerce, the Ministry of Home Affairs, the Ministry of Education, the Army and Navy devised the Food Association (1924) as a solution to Japan's population food problem. The army's accountants in charge of accounting and food, clothing, and housing became the center of its activities, and Ryoyu-kai, which consisted of great figures from politics, conglomerate, and academia, rapidly expanded its power based on the Population Food Research Committee led by Prime Minister Tanaka.

The character of Marumoto who was considered as a practitioner at the forefront of the Ryoyu-kai, as well as the influence of his activities and methods were revealed, and the kitchen education conducted by Ryoyu-kai was also analyzed. In cooperation with commercial facilities such as canning associations, department stores, other social education facilities, and women's schools, Ryoyu-kai actively participated in the events held there and brought educational materials for them to improve the diet of general public. In addition, while establishing relationships with various magazine companies, food-related information was spread from Ryoyu-kai, and its area of informing activities in the magazine was expanded.

This study considered two of the contents of the education which were emphasized from the beginning, namely, market economy education for housewives and food preservation education. A list of market prices, which are the standard for each item, was posted as a permanent record of shopping prices, and housewives were educated to use not only the list but also the public market so that they could monitor the business. Besides, accountants encouraged the daily storage of food in case emergencies and taught the public how to make bottled food. In order to spread it nationwide, housewives competed with each other taking part in competitions where they could show the results of their bottling.